

---

# 細石～さざれいし～

なまはげ秋田

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

細石くさざれいし

### 【Nコード】

N0958P

### 【作者名】

なまはげ秋田

### 【あらすじ】

細石くさざれいし。そんな細石の様な小さな話達。ヴァルキリープロファイル短編集です。

## 自分的覚書（前書き）

なはまげ秋田の勝手な解釈と設定の覚書。生かす設定あり、捨て設定あります。

## 自分的覚書

・ブラムス 不死者王 黄橡の髪 赤眼  
・シルメリア 戦乙女 金髪 深緑の目

筆者不動のツートップ。好きすぎて書けないという貴重な経験をさせていただきました。

エインフェリア↓シルメリアが集めたエインフェリア達に一体どんな背景がッ！！

ディパン↓ブラムスが転生していた、あの亡失都市は一体どんな歴史がッ！！

それが自分のベースらしいです。

どんだけ好きなんだよ、この二人が…。

- - - - -

「ラッセン」

・設定

別働隊の中心人物十人を指して後世の人は「ラッセン十傑」と呼び、別働隊も解放軍と呼ぶが、当時は自分達も評議会も別働隊と呼んでいた。

大陸でも特異な政治形態を持ち、特に王政を敷く各国からは常に警戒の対象であると共に王族が存在しないので影で二流国扱いされている。がラッセンは国として其れを承知しており、逆に利用するというしたたさで滅びを回避した。存続の形は変化したがラッセンという名はV P 1 迄存続している。

筆頭三家〃オルトマーレ、アルジェント、ブランシュ

・人物

■ファースト

ラッセンの申し子 琥珀色の髪 天鷲絨の目 ブランシュ家

■ガウディ將軍

ラッセン解放軍 アルジェント家 カミールにて「ラッセンの銀獅子」と呼ばれる

■ダマスカス將軍

ラッセン防衛軍

■フェルマー執政官

ラッセン解放軍 セラフィ領主の幼馴染 オルトマーレ家

■セラフィ

ラッセン領主 オルトマーレ家

■ロスト

セラフィの弟で現オルトマーレ家当主 この兄弟は当主を互いに押し付けあつた過去あり。

- - - - -

「ディパン」

・設定

三兄弟の父国王 母王妃スフィア（仮） ディパン王家は目の色素が薄い。したがって転生していたブラムスの目も薄茶。

・人物

■アレス

ディパン三兄妹      金糸雀色の髪      灰青の目

■セレス■

ディパン三兄妹      赤錆色の髪      緑青の目

■フィレス■

ディパン三兄妹      蒲公英色の髪      空色の目

■イージス■

水魔（水霊）との契約で泳げなかったイージスは、水魔の願いでエインフェリアとなった。

シルメリアがエインフェリアとなった後に本人に事後承諾という形を取った唯一の例。

魔物が神に願うのも異例ならば、その願いを聞き入れた神族もまた異例である。

- - - - -

「パルティア」

・設定

この国は崩壊への時間をゆっくりと歩んできた。シフェルとフィレスはそれを回避しようとしたが、叶わなかったと解釈。

アルムが戦った冥界の竜王とパルティア建国伝説の竜王は何かしらの因縁あり。

パルティアの宮廷魔術師達は寝食は「魔術師の塔」で取る。

魔術師であれば全員そうだが、例外として身分が王子や王女であれば、己の魔力の制御が出来たら塔から王宮に戻る事が出来る。その塔の最上階はパルティア王家の秘蔵する本が置かれてある図書室である。

「ソロンの秘文書」と同等の重要性を持つ別名「ソロンの育児書」

と呼ばれる「竜眼王子成長日記」があるとか、ないとか。

・人物

■ジグムンド■

竜鱗 槍使い 手の甲一面に鱗の模様をした痣あり

■シフェル■

槍使い 金髪碧眼 竜印は無い 絵的にはタレ目のロウファな感じ

■アルム■

魔術師 金髪碧眼 竜眼

■ソロン■

魔術師 不死者に育てられる

時のパルティア王家に乞われて宮廷魔術師となるが、その理由は竜眼の王子に魔力の制御を身に付けさせて欲しいというものだった。

ソロンの秘文書は別名緋文書と呼ばれ、緋色の文字で書かれていたのが由来である。その秘文書だが、本の魔力で作り出した幻影に読み手の意識を引きずり込むという危険な本でもあった。

秘文書を開く者は本を読む「読み手」と「読み手」の意識を幻影から呼び戻す「呼び手」の最低二人以上で開かなければならない。

■ウォルス■

J Dウォルスの双子の姉で「黒森の魔女」と呼ばれる。

幼いソロンを拾い育てる くすんだ金髪 赤い目

立体魔方陣の大家であり、ソロンの秘文書の魔方陣は、師匠たる彼女の指導の賜物と言えるだろう。

■マイカ■

ウォルスの使い魔のヤモリ 人型を取る時はおかっぱ頭で髪も目も

茶色の少女。

■ J・Dウォルス ■

ウォルス姉妹の双子の妹で「天空の魔女」と呼ばれる。

くすんだ金髪 赤い目

姉〃大地、妹〃天空 姉〃魔力は体力勝負！、妹〃魔力は色気勝負！  
遠い昔に袂を分かった二人ですが、「お姉様、ポイズンブロー」  
的な感情を胸の奥底に秘めているといった感じか？

なまじ双子で顔がおんなじだけにあらゆる意味で対照的というか、  
違いが浮き彫りになると面白いのだが。うん。

- - - - -

「ロゼッタ」

・設定

隻眼の写本は「写し」だからこそ人間に魔力の制御が出来た。本来は黒い表紙に一つの眼が描かれているが、カモフラージュの為にブックカバーを掛けている。↑誰が（笑）

一年戦争当時の王家は元は傍流で、本流は不死者と契約した狂王によって全滅した。

基本的にエーレンとクレセント以外の組み合わせは仲悪い。いつかクレセントとセレスの女同士の刺々しい丁々発止な会話を書いてみたい。自分的には解釈や設定が固まっていない人達の国でもある。

・人物

■ゼノン■

写本を制御出来る魔力を持ち、生前は写本の魔力も加味されて割とやりたい放題な感じだろうか。

隻眼の写本との契約で左目の色が黒へと変化した。最終的にはそれが墓穴となる。

## ■エルド■

仲間にするのに筆者は三日かかって超しんどかったのと、戦闘で呼び出したら背がちゃんまりしててすげー驚いたのはいい思い出。

## ■アドニス■

あの時代において最強の傭兵。正義とか、倫理とかは彼には無用の長物。

ロゼッタ王家の血が流れているという裏設定つけたから（剣術も基本のみが正統というのは、実はこの裏設定にかけていた。捨てたけどw）、言動は乱暴だが粗野では決して無く、うつすらと品を感じさせる様に自分は書いているつもりだが、結果がそうなっているかは不明。そういう意味では書きづらい人。

## ■エーレン■

額飾りを取ったら、そこに天眼石が埋まっていたら面白いかもしれないと思った時期が自分にもありました。

案外「一生消えないマジックペンbyソロン」で額に「肉」とクレセントに書かれたのかもしれない。そうだったらいいなーと切に思う。

- - - - -

## ・その他の人物

## ■ザンデ■

Y A T T A！君は葉っぱ隊のイメージだ！でもその域に達するまでには色々あったのだ。

身体の模様とか、ザンデ流は理由あり。

・動物に例えてみよう

ファルクス ヤマネコ

ファーラント シロフクロウ

アレス ジャガー

セレス 雪豹

ファイレス 豹

イージス 白熊

ソロン フクロウ

シフェル 馬（尾花栗毛限定で）

ゼノン 灰色狼

エルド 雲豹

アドニス 黒豹

- - - - -

・親猫と子猫 （活報でちらつと書いたらなんか面白そうだったの  
で）

親猫に囲われた上に四肢でがつつりホールドされている子猫

ブラムス

シルメリア

アドニス  
親猫に首を啜えられてぶらんぶらんしている子猫  
セレス

ウォルス  
親猫にてしつとネコパンチをしたらバチコーンと拳が返ってきた子猫  
ソロン

## 自分的覚書（後書き）

今書いてないものもあり、変更ありとかでじんわり増えていく予定です。

ちょこつと更新しました。自分の手の内晒すのって緊張します。

## 腐った竜と腐った職人

「腐った竜の歌」

腐った竜は結晶を弾く。

汚れた翼に付いた爪で。

闇に抱かれた冷たい結晶。

歌うことを捨てた竜は、結晶を弾いて歌う。

竜は玉座の間に入る。

闇より暗い玉座の間。闇に抱かれし結晶。

我は王が不在の時、玉座を守るためにしか入らない。

なのに結晶は常に王と共に在る。その中に醜い神族がいる。

貴様が何故此处に在るのか。

憎い憎い憎い。

砕いてしまえ。

翼を広げた時、爪が結晶を弾いた。

鋭く、硬質な音は闇に響く。

歌。捨てた歌。もう歌うことは出来ない、竜の歌。

貴様が歌うのか？ 我の代わりに歌ってくれるのか？

竜は何度も爪で弾く。

音は何度も闇に響く。

竜は歌う。

「気に入ったのか？」

城の主は問いかける。

何時、王は還つて来たのか？

怒らないのか？

竜は後ろを振り返る。

「好きなだけ、歌うといい。」

王は玉座に向かって歩く。

今日は、王と共に在る。

王の為に歌う。

王と共に竜の歌を聴く。

腐った竜は結晶を弾く。

汚れた翼に付いた爪で。

闇に抱かれた冷たい結晶。

歌うことを捨てた竜は、結晶を弾いて歌う。

- - - - -

「腐った職人の技」

ドラゴンゾンビが又扉を壊した！

レッサーヴァンパイア達は怒り心頭だ。

まったく、直す身にもなれ！！

人であつた時、職人として腕を揮つた。

王城の建設にも携わつた者もいる。

名工と謂われた者も多数。

死を迎えた時、転生を拒んだ。来世も職人になれるとは限らない。

ならば、不死者でもいい。職人でいたい。

自分一人と思いきや、同じ思いで不死者となつた者が結構いるもん

だ。

わしが一番だかの。私に決まっているだろう。いや、俺だぜ。以下同文。

腕に覚えのある職人だった者達は、不死者王の城に集う。

此処は、思いつき腕が揮える。

王は我等を統治しない。それでもいい。

王に相応しい城にする。我等が勝手にする。

それでいいのだ。

勝手に増改築を重ねて、城はどんどん大きくなった。

といつても、数多の職人がいるおかげで、

色々な事案がすんなり決まらないのもまた事実。

「この部屋は不要ですね。」

「いや、必要だ。」

「具体的に何故必要か示せ。出来なければ、却下だな。」

「ラム・ガーディアンが剣を置く部屋が欲しいと言った。」

「作らないと、切り殺されますね。」

「この装飾は、全体の調和を壊すぞ。」

「無駄に煌びやかじゃのう。」

「古臭ぜ、じいさん。これくらいやってもいいだろう。」

「だから、色調から問題だと言っている。」

夜の孤城で激しく論議をする。

いやはや、これもまた戦いか。

「とりあえず、ドラゴンゾンビが通れるくらいの広さにせんといかんじゃろ。」

「そっちが先ですかね。」

「王が不在の時を狙って飛んで来るぞ。」

「爪で結晶をつんつん弾いてるな、奴等。」

「叱られるのが怖いんかのう。」

「叱られるどころか、昇天ですよ。」

「そもそも、つんつんして楽しいのか？」

「楽しいんじゃないの？俺等が城に手を入れるのが楽しいようにな。」

「

「おお、若いのに相手を貶めんとは、いい心がけじゃのう。」

「じいさん、一言多い。」

腐った職人。腕まで腐っていると思ったら大間違い。

彼等は仕事に取り掛かる。

時間をかけて、納得のいく仕事をする。

此処は時間に追われない。

扉を直し、最終調整をしている中、

「相変わらず、いい腕をしている。」

玉座から声がした。

職人にとって何より嬉しい言葉を、我等の王はくれる。

明日の日中はよく眠れそうだ。

腐った竜と腐った職人（後書き）

初出 2007/3/23

## 「王呼の秘法」の独り言

やあやあ、僕は王呼の秘法だよ。

いや、「君しやべれるの？」とかそんな質問はしないでくれよね。出自は失伝魔法なんだけど、「誰でも彼でも出来るんかい!!」

みたいな事を、・・・まあ色々言われてるけど、

僕は「王が」「呼ぶ」「秘めたる」「法」だからね、そこんところロシク。

でさあ、「王」たる者のみが僕を呼べるわけさ。

オーディンはヴァルハラ「王」だろ。

ブラムスも不死者の「王」だし。

だから僕を呼べる訳さ。

ま、スルトもヘルも呼べるけど、呼ぶ気が無いみたいだよ。

その方が僕としても有難いんだよね。

しょっちゅう呼ばれても困るー、みたいな気分が僕にもあるのさ。

だってさ、安売りしてるみたいだろ？

僕の価値が下がるー、的な気分だったのさ。

同じ出自の仲間にも「安っぽいのう、お前は。」とか

「あんたのせいであたしらの価値がガタ落ちだわよ。」

なんて文句を言われてるんだよ？

正直、気持ちはブルーさ。

- - - - -

で、例の人間達が僕を発動させた事件。

ありゃ、参ったよ。

「人間」はともかく「王」じゃ無いじゃんか。

でも呼ぶだけの魔力はあったから、渋々登場したんだよ。実は。

僕にもプライドがあるからさ、魔術師達をぶっ飛ばす予定だったのさ。

「逆喰い」と言ってね、まあその何だ、術が跳ね返るって言ったら早いかな。

適当な存在に転生させちゃう事なんだけど。

そしたら不死者王がぶっ飛ばしちゃった。

「初めから不死者王が呼べばいいじゃんか。」

これ、僕の気持ち。

あ、内緒にしてもらえたら喜ぶよ。

それはこっちに置いて、と。

「王」でない存在に呼びつけられて、しかもぶっ飛ばす予定を壊されて

正直固まってしまったよ、僕。

固まった上に不死者王が僕を崩しにかかるしね。

思考回路が停止した状態でこっちも抵抗する訳さ。

僕自体は完璧な発動では無かったよ。

だって「王」が僕を呼んだ訳じゃないからね。

でも力場は安定してるから、それなりにキツかったと思う。

僕は分身の術が使えるから、不死者王が呼んだら完璧な状態で発動出来たね。

不死者王は魔力の知識があるからさ、僕を部分的に扱えたり出来るのさ。

不死者王とヴァルハラ王は僕の仲間を沢山知ってるしね。

でも自分自身が発現した直後だったし、

僕が不完全状態てのはすぐ判っただろうから

取りあえず崩しにかかったんだと思うよ。

崩した上で発動させる気だったんじゃないのかな。

そうこうしてる内に・・・後はみんなが見たとおりさ。

オーディンはこれ幸いに長女の転生先をヴァルハラにしちゃうし。

眼鏡魔術師は三女をかつさらって行くし。

不死者王は僕みたいに固まるし。

滅茶苦茶な状態だったね、いや、ホント。

- - - - -

頼むからさ、もう少し僕を大切に扱ってくれないかな？

「王が」「呼ぶ」「秘めたる」「法」に全然なつてない気がするんだよね・・・。

「もちつと大切に扱えよ！呼ばれても出てやんねえぞ！！」

あ、これも内緒にしといてね。

「王呼の秘法」の独り言（後書き）

「王呼の秘法」は言うだけ言ってスッキリしたらしい。

初出 2007/5/26

## 場外乱闘

グングニルって知ってRU？

ヴァルハラを支えてる私の事だYO。

長い間、ずっとヴァルハラに存在してるんDA。

だから、こうやってしゃべれたりするんだYO。

それなりに歳食ってるから、受け狙いでカワイイ口調で話してまSU。

私はね、たま〜に腹黒いオーデインに振り回されるんだよNE。

「・・・やめろ、グングニル・・・。」

ドラゴンオーブが睨むから、やめとKO。

オーデインはね、色々言われてるけどヴァルハラにとってはいい統治者なんだよね。

本人の志もヴァルハラを総べる者でありたい、ヴァルハラに安定をもたらしたい。

それはいいんだけど実益と退屈しのぎを兼ねて人間界にちょっかい出すから、

人間界にとつては迷惑極まりないんだけど。

基本的に思考が腹黒い、手段もドス黒いだけなんだYO。

「グングニル、ウザイ！！」

シルヴァンボウには言われたくないZO。

自分が特異な存在という自覚は誰よりも強いもんね。

だから、逆らう者は赦さないって感じ。

「半分だけ神族」って言われてる気がするんじゃないかな。

で、同じ様な存在のヴァルキリーというかアーリイにちょっかい出す出す。

フレイとの関係はさ、見てのとおりなんだけど、アーリイとの関係は複雑怪奇。

アーリイはオーディンの思惑を知った上での対応で、そんなアーリイの心情を知った上でのちよつかいだもんNE。

「痛いですよ、グングニル。」

レヴァンティン、そっちとよく似た魔術師に振り回された私の気持ちGA・・・。

-----

「わかるかー！ー！！」

「何言ってるんですか？わかる訳無いでしょう。」

「貴様の！その！口調が！！気に障る！！！！」

「そもそも変態魔術師に負ける主神って、どうよ。」

「そんな主神の槍・・・。最悪だわー。」

「うるさい！出番の無い弓は黙っている！」

ドラゴンオーブ、貴様はつるつと奪われただろう！おまけに某創造神に拒否られてたな。」

「あんな扱いされるんじゃ、出番が無い方が有り難いわねえ。」

ドラゴンオーブ、あんた本当は大した力無いんじゃないの？見掛け倒しってやつよね。」

「波動の激しいミッドガルドと正反対の

のんびりエルフをのんびり支えてる、なまっちよろい弓には言われたくねえ！」

「はあ？時をゆるりと流す事がどんなに大変な事か知りもしないまんまる坊主が生意気なんだよ！」

「まあ、皆さん落ち着いて。言い争っても仕方無いでしょう。」

「うるせえ！テメエは黙ってる！！」

「狼の腹の中でぐーすか寝てるだけの変態魔剣に意見する権利は無

いぞ。」

「・・・言つてはならない事を・・・言いましたね・・・。」

「あら、変態魔剣がイヤならキモイ剣つてのはどう？」

「そいつはお似合いだなあ、レヴァンティンよりもずっと本性を表してるぜ。」

「お前もドラゴンオーブを名乗らず、まんまる坊主を名乗れ。」

「ヘタレの槍に言われたかねえな。」

「グングニル、あんた次からそう名乗りなさいよ。ぴったりだわー。」

「

「もやしの弓が偉そうに吼えてますねえ。弱い輩ほどよく吼える。」

「のんびりエルフともやしの弓か。使えない組み合わせだ。」

「主神がヘタレなら槍もヘタレが我が身を省みず、よく言えたものですよ。」

「私なら恥ずかしくて、とてもとても口には出せませんね。」

「・・・貴様の、その、ドス黒い物言いが、キモイと冥界でも大絶賛だろうが！」

「おどろおどろしい冥界を支える変態だもの。キモイのは当たり前よね。」

「支えてんじゃねえだろ。寝てるだけだぜ、キモイ変態魔剣様はなあ。」

「武器では無い貴様が言えた義理ではないだろう。」

「されるがままで、文字通り手も足も出ない坊主でも一人前に口は出しますか。」

「テメエら・・・殺されてえのかよ。」

「武器じゃないあんたがどう殺すのかしら？見物だわ。」

「せいぜい転がるくらいだろう。」

「案外、手足が生えるかもしれませんよ。」

「狼に食われる程度の武器なんぞ、こっちから願ひ下げだぜ。」

「武器としての役割を果たしてないわね。」

「冥界を支えているかどうかも怪しいものだ。」

「寝てても支えられる冥界かよ。楽な仕事だなあ、変態さんは。」

- - - - -

「坊主が!!」

「ヘタレ!!」

「もやし!!」

「変態でキモイ!!」

四つ巴の場外乱闘。口喧嘩で勝利するのは誰だ？

「・・・何故、私だけ一言なんです・・・？」

「キモイから。」

「変態だからだ。」

「アホ、変態でキモイからに決まってるだろ。」

場外乱闘（後書き）

出演 神槍Ⅱ戦乙女 光弓Ⅱお色気魔術師 竜玉Ⅱ筋肉戦士 魔剣  
Ⅱ変態魔術師

初出 2007/7/23

## クールダンセル宅急便

「毎度ー！！クールダンセル宅急便でーす！！」

「ああ、ご苦労さん。今回は早いんだね。」

「山賊が出なかったんで早まっちまいしました。あ、受け取りお願いします。」

「ハイハイ、ちょいちょいっと。いやー魚介類が丁度切れそうだったから助かったよ。」

「解凍は？」

「ミトラさん、自然解凍でいくから今回はいいよ。」

「了解した。」

「ここの魚介パスタ美味いからなー。ミトラ、食ってく??」

「ザンデ、食事は後だ。」

「早く届けてもらったお礼にご馳走するよ、お二人さん。」

「非常に申し訳ないがお断」

「本当っスか！！ゴチになりまーす！！」

「いいねえ、その返事！さ、ミトラさんもザンデさんの横に座って。」

「・・・宜しいのか？」

「たまにはご馳走させてくれよ。実は塩を変えてみようと思ってね。」

「塩か。ひよつとして岩塩とか？」

「鋭いね、トゥルゲンだよ。」

「あそこの岩塩はクセがあると思ったが。」

「そぞ。山鶏と合わせて今度メニユーに載せようかと思って。味を利いてくれないかな？ミトラさんの舌は的確だからね。」

「ザンデさんは何でも美味いだから、批評は期待できなくなつてさ。」

小声で話す料理人の声を聞きながらミトラは俯き、笑った。

奪われた舌。潰された目。剥がされた耳。  
無くした全てが今、ミトラと共に生きている。  
だからミトラはその全てを駆使し、生を感じる。

- - - - -

「よー！ミトラじゃなか！久しぶりー！」

笑いながら声をかけてきた若者の元気な声に振り返った。

喪失の森で川で乱射する光を受け、ぶんぶんと手をふるザンデ。

屈託のない笑顔。影の様な自分とは正反対の存在。

「本当に久しぶりだな、ザンデ。こんな場所に何か用があるのか？」  
解放後に別のエインフェリアと会うとは思っていなかったミトラは驚いた。

「いやー、迷っちゃってさ。どうしたもんかと闇雲に歩いていたら  
あんたを見つけた。」

額の汗がキラリと光る。

こんな小さな森で迷うとは。ザンデは方向音痴なのか？

小さな疑問を口には出さずに、別の言葉を口にする。

「森の入り口まで案内しよう。」

「助かるわー。ミトラは今何をしてるんだ？」

「生を感じている。」

「そっか。充実してるんだな。」

ミトラが生を失った理由をザンデは知っているのか、いないのか。

答えを口に出さずに別の答えを口にするザンデ。

「充実している。ザンデは何をしている？」

帽子のつばを少し押し上げてミトラは問い返す。

「俺も充実してるぜ！何せ森に迷ったからな！」

些細な事でも楽しむ、小さな失敗も楽しみに変える若者。  
解放後もザンデは相変わらずの様だ。

「ミトラ、俺と組まないか？」

森の入り口まで来た所でザンデは思いがけない提案をミトラに持ちかけた。

「組む、とは？」

普段なら警戒するであろう提案。生を失う理由を考えれば致し方ない。

だが、目の前のザンデは表も裏も無い。

「実はさ……。」

解放後、世界のあちこちを放浪した事。

海から離れた場所にある定食屋の魚介パスタが非常に美味かった事。その店の料理人は中々魚介類が手に入らず困っていた事。

「でさ、クールダンセルで商品を凍らせて運ぶつてのを考えたんだ。」

「いい案ではあるが。代金の問題があるぞ。」

「それは考えた。信用問題でもあるから、こっちが仕入れて運賃込みで支払ってもらうつてのは、どうだろう。」

「一度に多くは稼げないな。ザンデはそれでいいのか？」

「店にとって今の仕入れ値より安くなれば、それでいい。」

「……。」

あご髭をなでながらミトラは考え込んだ。

確かにこの提案は素晴らしい。

自分達も儲かり、相手からも喜ばれる「仕事」だ。

何より自分のクールダンセルが生かせる。

ザンデは商売とは無縁の生き方をしてきた。

そっち方面は疎いから、冷静に契約や代金の事を見れる人物が必要になる。

鳥の声が森から聴こえた。

「ミトラが嫌ならいいさ。」

「その定食屋は本当に美味しいのか？」

「あんな美味しいの、食った事無い！」

「魚は何を使う？」

「キレイな色や地味な色の魚だなー。」

「街道を通るのか？」

「基本はそれだけど、急ぎの時は山道になるかな？」

「ついでに狩りをして仕入れするのもいいかー。」

答えになっていない答えを口にするザンデ。

自分が生を失った理由。

失われた舌、目、耳で生を感じ、充実している今。

「お前は天然か？」

思わずミトラはザンデに問うた。

「へ??？」

両手を頭の後ろで組み、空を見ていたザンデが間の抜けた返事をした。

空が眩しい。

そして口が言葉を発する。

「その提案に乗ろう。」

「本当か?? やっぱ降りるなんて言うなよ！」

「私でよければだが。」

「決まりだ！決まり！！やったー！！！」

数日後、実はミトラを当てにして喪失の森に来た事をすまなそうにザンデが言った。

予想内の言葉にミトラは笑った。

「だってさ、クールダンセルと言えばミトラ。ミトラと言えばクールダンセル。」

それしか思いつかなかったんだよ。それがザンデ流。」

- - - - -

山鶏のパスタを美味そうに平らげていくザンデ。

ミトラはザンデの「美味しい！美味しい！やたら美味しい！」を耳にしな

がら皿の上の料理を見、その印象を口にする。

フォークに巻きつけた麺を口に入れ、山鶏と香辛料と塩加減を舌に乗せ

その感想を口にする。

貴重な意見を聞いた料理人は奥へ消えた。

開店前の店に他の客は居ない。

ザンデは完食し、腹を叩きながら食後のお茶を飲んでいる。  
ミトラはまだ料理を楽しんでいる。

その二人の目の前に山鶏の肉の塊が置かれた。

「出稼ぎに行った妹に、これを届けてくれないか？」

料理人から仕事の依頼が来た。

「よっしゃー！その依頼、受けた！！」

「場所は何処になる？」

——クールダンセル宅急便——

依頼された仕事は完了した。

そして新たな仕事が舞い込む。

## クールダンセル宅急便（後書き）

三角帽子のロゴマークが今日もミッドガルドを突き進む。

初出 2007/8/2

## 皆既食

ほんの僅かな変化。

足を組み、肘を付いたブラムスは閉じた瞼の下でそれを見た。竜玉が奪われた。崩壊が始まる。

「時が至ったか。」幾星霜の闇を重ねた声が呟いた。不死者王の誘いに運命の女神が返事をする。

豪奢な天井で冷たい光を放っていた結晶はそのまま天井を滑り出した。

玉座の横の天空で止まった次の瞬間、分厚い床にめり込んだ。轟音と衝撃を凝った闇が抱く。

玉座の王は闇で真紅の印を刻んだ。

日中にありながら暗雲が島の上空を侵食し始めた。

人間界に蠢く数多の生物。生を持たぬ存在。

別を守るつもりは無い。ただ、城が人間界にある。

活動拠点が人間界故に破壊は望まない。

シルメリアも人間界の破壊は望まない。

死の闇の中に在って生命を纏う戦乙女。

蒼穹の鎧は晴れ渡った天空。その天空にかかる黄金の髪は太陽。

瞳は大地を覆う命の色。

運命の三姉妹の末は上の二人より激しい。

太陽の様に全てを焼き尽くし、自分自身さえ焼き尽くす。

自身が灰塵と帰す前に冷冽な結晶にその身を委ねたのは運命のいたずらか。

人間は上手い喻えをしたものだ。

前方を見る真紅の双眸は古の筆跡を闇に見る。

- - - - -

神は永遠の流れの中に在り、人の輪は閉ざされた。  
神は知る。

人は知らぬ。

永遠の時の流れに溺れる事を赦されぬ人。  
生き、産み、育て、そして還る。  
止まる事を忘れた輪廻の輪。

流れる時を知る人は誰ぞ？

朝と昼と夜の女神に選ばれし人そのみ知る。

姉妹の持つ剣の色や如何に？

人は夕刻の空と鑑みる。

交わる事を拒む故に並び立つ。

時が運命と共に互いを抱く刹那。

選定された魂は、現世で最後にこの世ならぬものを見る。  
美しく、荘厳な存在を。

- - - - -

玉座の横に在る運命の女神。

その髪と同じ色の太陽は暗雲の下で日食を始めた。

暗雲は雨雲となる。

命の水が乞われ城を訪れる。

結晶が強く、弱く光りだした。

夜が孤城を支配する。

城の竜達が汚れた翼を広げ、城の周りを飛び交う。  
醜い神族が命の歌を歌う。

歌うことを捨てた竜は翼と共に歌う。

腐った職人は相変わらず城に手を入れている。

ラム・ガーディアンは城を守る。

王は我等を統治しない。

だが、我等の王は不死者王のみ。

不死者王は我等に亡失した生の波動をもたらす。

玉座の横の結晶がそれを放つ。

四界に於いて誰がそのような事が出来る？

我等の王のみ。

王は我等を統治してはくれぬ。

それでもいい、我等の王は不死者王ブラムス唯一人。

真紅の双眸と瞼に覆われた緑の双眸は前を見る。

「お前が望んだ事だ、シルメリア。」

明滅する結晶は何も言わない。

ただ、その光が静かにブラムスを覆う。

闇より暗い玉座の間で二人は静かにその時を待つ。

皆既食（後書き）

初出 2007/5/4

## 残滓

もうじき、私は消失する。

「ラグナロク」は猛り狂いながら神界を呑み込んだ。

転生先が決まらぬまま、次元の狭間で眠っていたが故にかろうじて存在している。

この身に残る僅かな力。それを用いて精神を器で覆う。魂の無い、精神のみの特異な存在。

中は未来を創った。

未は現在に留まっている。

私は過去を、オーデインの残滓を抱いたまま消失する。

それが私の運命。

- - - - -

「知らぬな。」

ブラムスは玉座に座ったまま何の感情も無い声で答えた。

不死者王の横には冷たい光を放つ戦乙女がいる。

闇より暗い玉座の間。

入り口には大剣を担ぎ、顔に傷跡を刷いた重戦士が立っている。

「此処には来ていないんだな。」

念を押すようにアリューゼは言葉の続きを口に乗せる。

アリューゼの声は闇に吸い込まれた。

闇の質量が加速的に増加する。

そして真紅の印が刻まれた。

「くどい。」

幾星霜の闇を重ねた声が圧倒的な気配と共に浸透する。

不死者王ブラムス。

その力はラグナロクをも退け、夜の孤城と共に再びミッドガルドに現存する。

新しい世界に残る古い世界。

だから、ここにアーリイが居るかも知れないとアリユーズは思い至り、訪れた。

返事は「否」であった。

「そうか……。邪魔したな。」

一言いうと重戦士は踵を返し、入り口から離れていった。後姿が徐々に小さくなっていく。

そして消えた瞬間、鈍い音と共に扉は閉ざされた。

- - - - -

「感謝する。」

漆黒の声が前方の闇から響いた。

闇に溶けた人影が徐々に輪郭を頭わにする。

運命の女神、漆黒の戦乙女、夜の長女アーリイ。

戦乙女の上は静かに微笑んだ。

残滓（後書き）

初出 2007/7/25

## 灰色狼

「うおおおおおー！ー！ー！ー！ー！」

ゼノンは左眼を両手で覆いながら喚いた。

仰け反る宮廷魔術師を隻腕の姫が無言で見ている。

二人の間には燃えさかる一冊の本が横たわる。

その炎のみが暗い部屋の灯りとなっていた。

白い頁にびつしりと書き込まれた魔術、呪術、魔方陣。

その頁と魔力が炎に焼かれ、黒い煙となって窓から、人間界から去ってゆく。

人間の手から移された炎は、白い頁から黒い革表紙に描かれた大きな一つの目に及んだ。

宮廷魔術師は左眼を押さえたまま大きく仰け反り、あらん限りの力で叫ぶ。

写本の断末魔の叫び声が一層大きく部屋に響き渡った。

「写本の契約の証も燃え尽きるわね。」

静かな声が波紋の様に広がった。

――隻眼の写本――

その名の通り、この本と契約した者はその片目を契約の証とする。

契約した者の瞳は、革表紙と同じ色に変化する。

右の眼と左の眼の色彩が異なる「異眼」。

ゼノンの魔力の源は、黒い左眼にあった。

「完全に操らず、契約した者の意思を残す。それが写本の写本たる所以だわ。」

本物ではなく写しだからこそ、人間にも魔力の制御が可能となる。」  
フィレスの両眼に燃えさかる本が映る。

ゼノンは自分の喚く声を聞きながら床をのたうちまわった。

「終わりね。宮廷魔術師も、ロゼッタも。」

聞く者に感情を悟らせない声が床に落ち、ゼノンの側から遠ざかる  
気配。

「 ..... せ ..... 」

足音は扉の前で止まった。

「聞こえないわよ。」

「ころせええええー！！」

両肘を床に付き、上体を起こしてゼノンに叫ぶ。

白いローブは闇で灰色に染まる。

フィレスは振り返り、「異眼」を見た。

乱れた前髪が宮廷魔術師の両眼を露わにしていた。

\_\_\_\_\_

「宮廷魔術師の左眼は炭の色をしている。」

右腕を斬る瞬間、姉は妹の耳元で囁いた。  
ひとり。

くぐもった音が二人を裂いた。

「あああああ——！！」

「自分の居場所に戻れ！！」

姉妹の叫ぶ声が戦場で重なる。

焼けつく痛みの中で、妹は姉の背を見た。

涙で姉の背が滲み、薄れた。

遠ざかる白銀に、妹の呻く声がぶつかる。

「炭は……燃やせば……。」

声は静かに弾き返された。

「灰となる。」

誰も聞いていない。アタシだけが聞いた。

それで、いいの。

-----

ゼノンの左眼は燃え尽きた灰の色となった。

瞼がその眼を永遠に覆わない限り、「隻眼の写本」との証は消える事は無い。

写本に限らず、魔力を秘めた物との契約は、その代償を求める。代償は様々だ。命、金、地位、名誉、愛する存在。

宮廷魔術師に対して、隻眼の写本は契約の代償に命を奪わずに視力を奪った。

オーデインの考えそうなことだ、とフィレスは思った。

「そちらが本来の貴方、というわけ。」

「俺が憎いのだろう。この戦争を仕掛けた張本人だからな。」  
狂気を顔と「異眼」に貼り付け、ゼノンは笑った。

「己の狂気の制御にあの本を利用したの。」

「多くの人間を死に至らしめた。死人が呪っても呪い切れぬくらいにな。」

「オーデインが目を付る訳だ。」

「だから、殺せ！！」

「何故、貴方に慈悲をもたさなければならぬの？」

「・・・慈悲だと？」

「全ての責を負って、命と引き換えに？寝言は寝てから言うものよ。」

「貴様、何を言っている・・・」

「自分だけさつさと苦しみから逃れようなんて。寝言以外の何なの。」

「ゼノンの「異眼」から視線を外し、フィレスは扉に手をかけた。

「自分が仕掛けた結果を、自分自身の眼で見るがいいわ。」

貴方の幕引きは貴方がこの世にもたらした現実が、する。」  
言葉の終わりと同時に、隻腕の姫は扉の向こうへ消えた。

廊下を歩きながらフィレスは呟いた。

「群れからはぐれた狼は、いずれ死ぬわよ。安心しなさい。」

光の無い部屋。

その冷たい床でうずくまった隻眼の灰色狼は狂った遠吠えをした。

- - - - -

そして月日は流れる。

ゼノンはサーマ砂漠を見つめていた。

視界一面に広がる夜の砂は灰色をしている。

「うちの妹に比べると、可愛いものよ。」

笑いながら言ったセレス。

「確かにそうですね。」

答えた自分。

「ちよつと！姉さんに言われたくはないわよ！！」

慌てて割ってはいるフィレス。

戦乙女に呼び戻される迄の僅かな時間のささやかな会話。

あの時、一緒にいたもう一人は誰だっただろうか。

「誰でもいいですけどね。」

両手で髪とフードをかきあげる。

砂漠の乾いた風が隻眼の灰色狼の顔を、通り過ぎた。

灰色狼（後書き）

初出 2007/9/8

## 深淵

ラグナロクの衝撃が城を襲う。

終末は暴れ狂いながらミッドガルドを、アスガルドを、飲み込んだ。  
「間もなく全てが終わる。」

玉座の前に立つ不死者王の身体からその双眸と同じ真紅の気と波動が絶え間なく立ち昇る。

上から下へ、下から上へ、右から左へ、左から右へ。

城外はラグナロクが荒れ狂い、いつ終わるとも知れぬ崩壊の嵐が吹き荒れる。

間断無き破壊のうねりの中、断末魔の叫び声と共に最大級の衝撃が城に喰らい付いた。

夜の孤城は呻きながら激しく揺れ、軋む。

その衝撃は城内を走り、玉座の間へと疾走する。

ブラムスが立つその床が大きく揺れた瞬間。

運命が動く。

金色の精神は結晶から零れた。

真紅の視界に一瞬仰け反った後、俯きながら倒れる精神が飛び込んでくる。

不死者王は強大な腕で、寧猛な手で、脆く儚い精神を抱いた。

その体の足首から下は、結晶が捕らえて離さない。

シルメリアはブラムスの胸で静かに顔を上げ、ゆっくりと瞼が開く。緑の瞳は真紅を認め、閉じた唇はゆるやかに開き、言葉を紡ぐ。

「・・・ひ・・・と・・・み・・・」

シルメリアの声の続きをブラムスの口が塞ぐ。

犬歯を持つ口から這い出たその舌はもう一つの舌へ狂暴に絡みつ

シルメリアから言葉を奪った。

不死者王と戦乙女が玉座の間で過ごした長い長い時間の中でこの邂逅は瞬き程の長さも無い。

だが二人の一瞬で永遠の時は今この時、確かに存在する。

ラグナロクの崩壊の様な激しい一瞬。

玉座の間と結晶の如く、静かな永遠。

真紅の色をした静かな激情がシルメリアを支配し、金色の精神はブラムスに全てを預けた。

このまま結晶から出てしまえば、転生すべき魂の無いお前の精神は消失する。

ぎりぎりまで竜玉の代わりをした精神は、磨耗している。

私の波動は磨耗の進行を早める。

想いと共にブラムスは静かに瞼を起こす。

真紅の視界に緑を覆う瞼と仄かに光る姿を確かめながら右手で長い髪をゆつくりとかき上げた。

そして静かに重なった唇を離し、額を合わせる。

「戻れ、シルメリア。」

言葉の終わりと同時に二つの額は離れた。

答える様にシルメリアの瞳が現れ、静かにブラムスを見つめる。金色に光るその顔は綻ぶように笑った。

結晶は静かにシルメリアの精神を引き寄せる。

それに呼応するように、瞼が緑の瞳を徐々に覆いだす。

「・・・ブラ・・・ム・・・ス・・・」

シルメリアの右手はブラムスの腕へと伸び、触れた。

今度は言葉を奪われる事無く、続きを囁く。

遠い昔、遙か彼方へ過ぎ去ったあの時と変わらない言葉が今この時、舞い戻る。

「愛・・・し・・・て・・・る・・・」

白い羽毛の様な柔らかい声と共に、その昔、剣を持った戦乙女の右手は不死者王の左腕を滑る。

腕から手へ、鋭い鉤爪を持つ指へと。

シルメリアはかつて愛した、今も愛する、これからも愛し続ける存在を確かめる。

不死者王は応える。

少しでも長い時を与える為に、その左腕は戦乙女へと伸び右手は金色の髪を愛撫する。

ブラムスはかつて愛した、今も愛する、これからも愛し続ける存在に触れる。

「私もだ、シルメリア。」

幾星霜を重ねた声は告げる。

結晶はシルメリアの頭部を引き寄せ、顔を覆った。

最後まで伸びていた戦乙女の右手が結晶に収まり、不死者王の鉤爪は硬質な音を響かせた。

ラグナロクは終焉へと加速する。

世界中が停滞から変化へと向かう中、ブラムス城だけは何も変わらない。

- - - - -

戦乙女を使役したオーディンは既に存在してはいない。

浅葱の戦乙女、レナスは創造主となった。

漆黒の戦乙女、アーリイはおそらく消失するであろう。

そして蒼穹の戦乙女、シルメリアは私の元に留まる。

お前はあの時、私に全てを委ねた。

未来は常に流れ、変化し、確定してはいない。

シルメリア、転生という理が可能となる魂が今から訪れる約束の地

に存在するか否かは不確定なのだ。

創造主の半身を手中にしている、と言えはそれまでだ。だが私は、私の横に座する者としてお前を据えた。その意味を誰が知る？

ブラムスは玉座に戻ると足を組んだ。

「では行こうか、漆黒の闇の淵へ。」

言いながら肘を付き僅かに頭を結晶へと傾けた。

そして笑いの形をした口から犬歯と言葉が現われる。

「なあ、シルメリアよ。」

深淵（後書き）

初出 2008/12/27

## 欠片

とある昼下がり、アドニスがヴィルノアの自宅の鍵を開けて入った時、

セレスは床にぺろんと横になっていた。

アドニスがいつ帰るかセレスは知らない。服装はいつもと同じ地味だ。

「大層なお出迎えだな、おい。」

小さく上下する肩を見ながらアドニスは呟いた。

寝ているセレスは起きる気配が全く無い。

アドニスは鍵を閉め、荷物と大剣を床に置いてソファーに座る。

今年の夏は暑い。そして確かに床は冷たい。

ひんやりした床で気持ち良さそうに昼寝する斬鉄姫。

アドニスは背もたれに肘を付き、もう一方を伸ばしながら室内を見廻した。

室内はきれいに掃除がしてあった。

窓も床も拭いて、扉や家具の取っ手は磨いたあった。

台所のテーブルには本が数冊置いてあり、筆記用具も見える。

室内を確認したアドニスはソファーから立ち上がり、水を浴びるための着替えを取りに寝室へ入った。

明るい日差しが寝室中に満ちていた。

布団は日に当たるように寝台の上で横に置いてあり、洗ったシーツはその横できちんと畳んである。

開けた窓から熱を含んだ風が寝室に吹き込んだ。

着替えを肩に掛けたアドニスが寝室から出てきた。しゃがみ込んでセレスを見る。

居間の床で寝そべるセレスはさっきとは反対を向いていた。

体温で熱くなつた床から逃れて冷たい床へ避難しているのだ。  
長い睫毛は動かず、表情は小さく微笑んでいる様にも見える。  
白い鼻先をちょいよいと撫でながら、アドニスは言った。

「ゾルデの猫よりだらしねえぞ。」

面白そうな声が床に落ち、そして欠片となる。その欠片は光を反射しながら辺り一面に散らばる。

光の中を黒衣が立ち上がり、小さな足音は浴室へと向かつて行った。

- - - - -

小さな物音でセレスは目を覚ました。

顔が熱い。夕日がセレスを染めていた。

「あ・・・寝過ごしたわ・・・。」

床から起き上がり、物音のする方を見ると黒い頭が見えた。

テーブルに向かいセレスは歩き出す。

近くまで行くとアドニスは背中を向けたまま、自分が座る横の椅子を指し示した。

セレスは何も言わず、黙ってアドニスの横に座る。

アドニスは白い首に顔を埋めた。

帰還の合図。

セレスは濡羽色を撫で付ける。

「おかえりなさい。早まったのね。」

「賊が出なかつたからな。」

「御免なさい。寝過ごしたわ。」

テーブルには簡単な夕食が並んでいた。

それを食べながらアドニスは言葉を続ける。

「オマエ、静かにイビキをかけ。」

「かいてないわよ・・・。」

「寝言もやめろ。うるせえぞ。」

「言っていないわよ……。」

「寝ている間の事が分かるのか、ああ？」

黒刃の恫喝する眼と声がセレスを刺す。だが、斬鉄姫は怯まない。

「寝言はともかく、イビキは今まで言われたこと」

ぐううううー……。

掃除と洗濯に夢中だったセレスは昼御飯を食べていない。

「すごいイビキだな、おい。」

「……これは、イビキじゃないでしょ……。」

アドニスを見んだまま、セレスは言った。

「じゃあ、何だ？言ってみろ。」

「……腹の虫だわ。」

真面目に答えるセレスの声を聞いた瞬間、アドニスはセレスの肩に顔を埋めて笑い出した。

感情が笑いの形で溢れ出す。

斬鉄姫が腹の虫を鳴らす。オマエ、やっぱり俺を笑い殺す気だろ。

「ちゃんと答えたのに、何故笑うのよ。」

くつくつく……。

返事の代わりにアドニスの肩が小さく上下する。

「笑いすぎだわ……。」

止まらねえんだよ。

「アドニス……。」殺気を感じてアドニスは止めを刺した。

「だったら寝言は言ってたのかよ。」

ヴィルノアの空は赤錆色から濡羽色へと移ろう。

人々の日常の欠片は、そんな空の下で今日も小さく眩しく輝くのだ。

欠片（後書き）

初出 2009/9/24

この後、セレスは「あーん」してアドニスに食べさせてもらつたとい  
う裏設定がありました。

## 契約者

その姿を太陽が出ている真昼に見る事が出来るなどと、今だかつて無いことであつた。

そしてこれからも決して無い、太陽の下の不死者。いや、不死者王。鋭い鉤爪で引き裂いた足元の魔物に一瞥もくれず、踵を返しシルメリアへと向かう。

不死者が太陽の下で活動する場面を生まれて初めて、エインフェリアとなつても初めて見たアドニスは口にした。

「・・・・信じれねえ・・・・」その言葉に呆れと恐れが混ざっている事に、神族と不死者だけが気付いた。

アドニスより前に出て魔物を屠つたブラムスが黒づくめの姿の横を通る時、呟いた声が鎧に吸い込まれる。

「契約者が。」

その言葉にアドニスは一気に殺気立ち、大剣を振り上げた。

「斬れるか、私が。」立ち止まらずにブラムスは続ける。問い掛けですらないその言葉を聞いたアドニスの背中に冷たい汗が流れ、ざわざわと鳥肌が立つ。

相手は不死者、だがその強大さゆえに「王」の名を冠する。不死者への本能的、生理的恐怖とともに、そんな存在を相手にするという歓喜が黒い刃を煌めかせた。

一瞬の殺気の応酬を羽毛の様な声が断ち切る。

「眩しいわね。」

太陽の如き金色の髪とともに微笑むシルメリア。ブラムスは歩みを止めずにシルメリアへと歩き、アドニスは振り上げた剣を動かし、黒い刃で太陽を隠した。

- - - - -

「契約者がエインフェリアとはな。」ブラムスがシルメリアの前に立つ。

太陽を背に立つ姿。不死者王ブラムスが生み出す影がシルメリアの全てを覆った。

契約者とは、一般的に不死者と何らかの契約を交わした者をいう。契約内容はそれぞれであるが、高位の不死者と契約した場合に於いてその証として契約者の瞳が不死者のそれと同じ赤へと変化する。赤といっても純粋な赤ではない。赤茶色であったり、アドニスのような赤銅色であったり、要するに赤系の色なのだ。

赤という色素自体が人間に現われにくく、髪であれば数が多くはないが存在しない訳ではない。

が、瞳となると自然発生率は極端に低くなる。皆無ではない、稀に赤系の色を持って産まれる存在もある。が殆ど無いと言っていい。ミッドガルド全体で何十年かに一人出るか出ないかの確率である。共に戦うエインフェリアはそういった自然発生ではないとブラムスは言ったのだ。

「だからエインフェリアにしたのか。」

「そうではないの、純粋に彼の強さが欲しかったから。」

シルメリアの言うそれは理由の一つであり、全てではないとブラムスは思った。

「ロゼッタ王家の本流、壊滅する何代か前に契約者が居たな。」

「その人物はこの世にも、エインフェリアとしても存在しないわよ。」

「遺伝子としてあの色を受け継いだ、か。」

ブラムスの口端から鋭い犬歯が小さく顔を出す。

それを見たシルメリアは困ったといった風に微笑みながら横に首を傾げる。

「確かにアドニスは契約者その人ではないわ。契約者の血統に生ま

れただけ。」

「あの戦いぶりは、狂戦士だな。契約者の名残りが濃い。」  
「だから欲しかったの。」

それまでブラムスの視線を受け止めていたシルメリアがアドニスを見る。

ブラムスはシルメリアの横顔を見ていた。

エインフェリアにした理由は力だけではない。他にもある。

おそらくは狂ったように戦うその滾りを鎮める為なのだろう、とブラムス思った。

「召喚」の後には「解放」が待っている。  
それ故に。

- - - - -

黒い刃で太陽を隠したアドニスは久しぶりに聞いた言葉を反芻する。

「契約者……」

手首を翻し、一陣の風を斬る。

「反吐が出る。」

唸る様なその言葉は風切り音にかき消された。

契約者（後書き）

初出 2010/10/26

## 棘

「エインフェリアになるか？」

闇の中で眩しい光を放つ金色の髪と緑の瞳を持つ神族。そう、戦乙女がひとつの魂に問い掛けた。

魂となった存在は、小さな光となったソロンは戦乙女を眺めながらどうしたものかと考えた。

あの女性と同じ命、いや同じ時間の流れを生きるのか。

そうしたら、あの女性<sup>ひと</sup>が何を考え、何を想い、何に生きたのか、理解できるのだろうか。

- - - - -

俺は五歳の時に、黒森と呼ばれる深くて暗い森の入り口に捨てられた。

その時は捨てられた理由なんて当然分からなかったし、誰も教えてくれなかった。ただ「捨てられた」という事実だけは理解できた。

その日は夜明けと共に起こされて早い朝食を摂った後、両親と共に家を出た。父親が「付いてこい」と言い、母親は弁当を詰めた籠を持ち上げて微笑んだ。

そして村を出発して、俺達親子は黒森を目指して歩いた。もともと当時は黒森なんて存在自体を知らなかったが。

家族に関して覚えているのは、二人の兄と三人の姉がいたという事だけだ。

だから、両親に誘われて家を出たのは、俺だけ特別にどこかへ遊びに連れて行ってくれるものだと思ったからとても嬉しかったし、弾む気持ちで親に付いていった。

実際とても楽しかった。母親が作った弁当を三人で食べる時は、三

つの笑い声が蒼穹の空に響いた。

歩いている間も、普段はあまり口を利かない父親が会話に加わった事で幼かった俺は凄く嬉しかったのを覚えている。

三時を過ぎた時間、黒森の入り口に辿り着いた。親と一緒に森の入り口をくぐり十分程歩いた場所でここで待つように言われ、俺は待った。

待てども待てども両親は俺を迎えには来てくれなかった。

鬱蒼と木々が生い茂る「黒森」は、真昼間といえど届く光は微かだ。そして夕刻となると辺りは闇となる。

恐怖に慄き、親に捨てられたという事実をうつすらと感じ取った俺は泣きながら入り口を目指した。

だが辺り一面は既に闇の支配下であり、俺は知らず知らずの内に森の深部へと歩いていた。人ならぬ気配や獣の遠吠え、森の中に響く小さな物音。それら全てが恐怖の対象で、恐怖が限界に達した俺は声にならない声で、ありったけの思いで叫んだ。

膝を地面に付き、両手で下衣を握り締めて叫んだ。そして涙を流しながら小刻みに息をしていた俺。

そんな俺に人ならぬ気配が近づいた。

黒い森の中で一際黒く染め抜かれた影、その細い影が徐々に近づいてくる。俺は恐怖のあまり呼吸する事も忘れてその影を凝視した。そして俺の側で止まった影は赤い瞳で俺を見る。

フードを後ろにおろしたから、くすんだ金髪が顕わとなるが闇の中では顔までは見えない。

ゆっくり膝を折り赤い瞳が俺の目と同じ高さになった時、初めて影が女性であると気付いた。

「故に捨てられたか、ソロン。」

紅い唇から零れた言葉。だが何を言われているのか、あの時の俺は分からなかった。

五歳の時、黒森に捨てられた俺を拾い育ててくれたあの女性<sup>ひと</sup>はウォルスと名乗った。

魔女と呼ばれた双子のウォルス姉妹。その姉である「黒森の魔女」  
との出会いが俺の人生を決めた。

生きている間にはその事実を忘れる時だってあった。だが、俺とウォルスが過ごした時間は棘となって俺に刺さり続けている。

棘が刺さった場所をそれごと肉が塞ぎ皮膚が覆う。だから棘は存在し続ける。肉が塞ぎ皮膚が覆う異常な状態が普通となっていた。それ程までに、棘は俺の一部と化している。

今もそれは俺の深い場所で存在しているんだ。

火炎魔法の完成と同時に「黒森の魔女」の存在は消滅した。

いくらその女性<sup>ひと</sup>が望んだ事とはいえ、俺にとつては身体と精神を引き裂かれる想いだった。

厳密に言えば不死者とエインフェリアの時は違う。だが似た様な時の流れを漂う存在、似て異なる者といったところか。

その時の流れに魂を預ければ。

あの女性<sup>ひと</sup>の心に近づけるかもしれない、そして遠ざかるかもしれない。

俺の中の奥深い場所、何人たりとも触れることの出来ない場所。そこで今もなお痛みを発し続ける棘。

—それと共にかの女性<sup>ひと</sup>と同じ時を歩いてみるか—

- - - - -

「俺を選ぶとは、いい眼をしてる。」

面白そうに返事をするソロン。

一つの魂はエインフェリアとなった。

棘（後書き）

初出 2010 / 11 / 18

## 竜印

「お久しぶりですなあ、姉上。ああ、そういえば、兄はどうしてますか？」

フードの下から光るアルムの竜眼を見つめながらフィレスが返事をした。

「あー、えーっと、どうも選ばれてないみたいなのよねえ。」

苦笑と共に出た声にパーティアの第二王子は皮肉という名の笑みを顔に貼り付けた。

「そうですか。まあ、我が兄ながら人が良いだけの無能な男でしたからね。」

あの人を無能と言い切るアンタのその竜眼は何を見ているのよ。口に出そうになった言葉をフィレスは苦笑と共に飲み込んだ。

フィレスの夫であるシフェルは美丈夫と名高いパーティアの第一王子である。

癖のある淡い金髪にすっきりとした鼻筋、長い睫毛が覆う青い瞳は少し下がり気味で中性的な顔立ちだ。

が力強さを感じる顔の輪郭や表情の端々、そして「竜鱗のジグムント」と呼ばれた父であり、国王である人物より直伝の槍術が彼を男性だと主張するのだ。

そのシフェルの明るい笑みや相手を退屈にさせない会話、時にくだけ時に上品になる振る舞い等々は宮廷内には止まらず、一般国民にも大層な人気であった。

容姿と性格が極上とくれば流した浮名も数知れず、ディパンの姫たるフィレスとの婚姻前に既に庶子が複数いた。

「王子様なら仕方ない。」笑いながらパーティア国民はその事実を受け入れる。

国民の支持というのは、次代の国王として何より得難いものである。

アルムにとってその事実は「全てを手中に収めた兄」への憎悪でしかなかったのか。それはフィレスの目の前に立つ人物しか知る由も無い。

シフェルと似た風貌を持つ義理の弟をフィレスは見ていた。いや正確にはその「竜眼」を。

夫であり国王が求めた「竜印」をその双眸に持つアルムを。

- - - - -

パルティアの建国にまつわる竜伝説。

その伝説によりパルティアの王位継承者は「竜印」と呼ばれる印を身体のだこかに持つてこの世に生まれるといわれている。

「竜鱗のジグムント」はその名の通り右手の甲に鱗の様な痣があった。

アルムに至ってはパルティア王統の全てを追っても三人しかいない「竜眼」の持ち主の一人である。

だが、シフェルに「竜印」は顕現していない。

過去にそういった人物が王になった例はいくらでもあるし、「竜印」を何かしらの形で人工的に宿した者だっている。

だが父と弟の両方が「竜印」を持ち、自身はそれを持っていないという事実はシフェルにとって重い現実であった。

「王たる資格無し、という事か。」

とある春の日の昼下がり、王宮の中庭を二人で散歩していた時にシフェルが小さな声で呟いた。

横を歩いていたフィレスは立ち止まったがシフェルはそのまま歩みをつづける。その背中がいつもより小さく見えた。

夫であり、次期国王たる人物を取巻く華やかな人間模様。

頭では理解出来るし何より王家の姫としてそう教育されたフィレス

は側室や庶子に関しては一切口を差し挟まなかった。

一人で泣いた夜は数知れず。八つ当たりで枕を布団に叩きつけた事だってある。

けれど、シフェルが全てを包み隠さずに話すのは自分だけだとフィレスは知っている。

だから支えていけるのだ、だから側にいれるのだ。

――だから守りたいの――

シフェルの華やかさに目を奪われて誰も彼の内面には目を向けないいや、向けないのではない。

シフェルは唯一人しか内面を見せていないのだ。その華やかさを隠れ蓑にして。

彼の髪は肩甲骨の下ほどまでの長さがあり、それを首の後ろで一つに括っている。

きらきらと輝く淡い金髪を見ていると涙が溢れそうになる。涙を堪えようとして空を見上げたフィレスは目を瞠った。

「シフェル！」

驚きと歓びの混じった声がシフェルの耳に飛び込んでくる。

歩を止め声のする方を振り返ると涙を流したフィレスが駆け寄ってくる姿が視界に飛び込んできた。

シフェルの片方の腕を掴み、相手の肩より頭一つ低い背をうんと伸ばすフィレスは笑いながら言った。

「空を見て！」

シフェルは自分と同じ色をした空を見上げる。

見上げた空には、細くて白い雲が青い空に緩やかな弧を幾つも描いていた。

「竜印ね。」

フィレスの嬉しそうな言葉は青い空をゆっくり渡る白い雲となり、

そしてシフェルの心を翔ける。

腕に暖かな体温を感じながら空を凝視していたシフェルは口を開いた。

「・・・そうだな・・・」

その声は僅かに震えていた。

「シフェルは竜印を持つ者ではないの、だって必要ないんだもの。」  
竜印を持たないシフェルの顔は上から下へと向かい、静かな視線は妻を真っ直ぐに見つめた。

「パルティアと共に竜印は在る。シフェル、貴方はその竜印を呼ぶ者なのよ。」

シフェルは泣きながら微笑むフィレスを腕の中に囲い込み、その頭に美しい顔を埋めた。

「・・・だからお前にぞっこんなんだ、私は。」

熱い吐息と共に囁く声を聞いたフィレスはゆっくりと残った手をシフェルの背中に廻した。そして背中であんなに淡い金髪をつんつんと引っ張る。

「ここに竜の尻尾があるわよ。」

更に強く押し付けられた厚い胸を頬に感じながら、未来の王妃様はくすくすと笑った。

シフェルが国王として統治する間、国が或いは国民が竜印を求めた時にそれを顕現させる。

だからシフェルは竜印を持たなかった。

- - - - -

「人が良いだけ」とアルムが評したシフェルの「人を惹きつける魅力」というのは国内は勿論の事だが対外的、特に「外交」に於いては強力な武器だ。

それは下世話な言い方をすれば「人たらし」（フィレスにとっては「含む女たらし」という意味もあるが）である。

しかし、その武器を自覚し、無意識にあるいは意図的に用いたシフェルは王になるべくして生を享けた人物といつていいだろう。

先天的な資質と後天的な努力。

生まれた時から側に居て、誰より何よりそれを知る義理の弟を見ながらフィレスは言った。

「まあ、あの人はエインフェリアなんて興味ないだろうから、誘われても断つてたわよ。」

「確かに無頓着な我が兄ならばそうでしょうな。」

シフェルが父親譲りの槍術を振るう時、首の後ろで一つにまとめられた癖のある淡い金髪が小さな竜の様に眩しい軌跡を描く。

期せずして二人は同じ情景を思い出していた。

## 交錯

前衛で魔物を倒したアドニス、倒した魔物が動かなくなった事を確認すると踵を返す。

漆黒の兜から不気味に光る赤銅色の視界には、自分の前方に剣を構えたままのセレスが映った。

「斬鉄姫」と呼ばれた彼女の足元にも既に肉塊となった魔物が転がっている。それを緑青の眼が冷ややかに見つめていた。

アドニスは肘を緩やかに曲げて片手で大剣を持ち、ざくざくと青い草を踏みにじりながらセレスへと歩いていく。自分に近づく存在に緑青の視線は地面から前方へと移った。

アドニスとセレスをエインフェリアとして召喚した戦乙女の鎧と同じ色の蒼穹の空の下。

昔、一人は侵攻軍の将軍として首都に攻め入り、もう一人は防衛軍として首都を守った。

――敵同士であつた二人の運命が今、交錯する――

漆黒の鎧は白銀の鎧の真正面に立ちはだかる。時が止まったかのような錯覚に陥る太陽の下で漆黒は艶を増し、白銀は光を乱反射する。その光が無音で「今」を歌っていた。

「デメエか。」

言いながら大剣をゆつくりと動かした。

濡れた様に艶を放つその剣を片腕で完全に制御するアドニス。あれほどの大剣を自由自在に操る腕力と強くてしなやかな手首は賞賛に値する。

生きていた時代、当代一の戦士と謳われた「黒光將軍」。

続きの台詞を吐きながら、アドニスは大剣をセレスの構える剣へ軽く打ちつけた。

「あの時は不覚をとったが、次はねえぞ。」

言葉の終わりと同時に乾いた金属音が小さく鳴る。

アドニスは言葉と同じく物騒な雰囲気を全身に醸し出していた。が、その表情からは如何なる感情も見取れない。

セレスは口を開くと、ゆっくり喋った。

「私が勝てたのは偶然の産物。もう一度戦えと言われても・・・」

緑青の双眸は視線を受け止めている。自分よりも高い位置にある二つの赤銅色に対して、挑む様に眼を僅かに細めた。

「困るわよ。」

言いながらセレスは口角を持ち上げた。凄絶な笑みが乱反射する光を従える。

一時の後、セレスから一切の表情が消えると同時に、彼女の両手は剣の柄を握り直し、足の位置を微妙にずらした。

それを見つめるアドニスは口端を吊り上げ、もう一方の手を大剣の柄へと添える。

二人の殺気がぶつかり合ったその直後。

「セレス。」

シルメリアがエインフェリアの名前を呼んだ。

二人は彫像の様に動かない。

戦乙女の発した言葉に追従するかのように、一陣の風がセレスの背中からアドニスの胸へと通り過ぎた。

セレスはゆるりと視線を後ろへと、シルメリアへと向けた。

そして剣の構えを解きアドニスに堂々と背中を向け、自分と呼んだ人物へと歩き始める。

「最初で最後の機会だったのに……。流石と言っべきね。」  
小さな笑みとささやかなため息をこぼすセレス。

鼻を小さく鳴らしてアドニスは笑った。

大剣を肩へと担ぎ、その視線は遙か前方にいる戦乙女を捕らえる。

「千載一遇の機会を平気でブツ潰しやる。」

面白そうに言いながら、前へと一步を踏み出した。

運命の女神は静かに微笑んでいる。

それは消え去った機会への手向けなのか。

交錯した二人の運命へと向けられたものなのか。

シルメリア以外に知る者はいない。

## パーティアの宮廷魔術師達が行く

「バーン・ストーム」

短い呪文に似つかわしくない盛大な緋色の炎が立ち上る。

その炎は自分を含めた魔術師達のバーン・ストームの炎と明らかに違っていた。

アルムは前方でその魔法を放ったソロンの先を、苦しみ悶える魔物と立ち昇る炎を見た。

竜眼が捉えた緋色の炎、その間にちろちろと光るものが見える。

それをもっとよく見ようとアルムが首を伸ばした瞬間。

爆風が当たり一面へと弾け、アルムのフードを後ろへと押しつけた。賢者とパーティアの書物に書かれたその人物は、尖った帽子を飛ばされまいと片手で押さえている。

魔物が消滅した事を確認したソロンが手を帽子に当てたままくりりと振り返った瞬間、二人の視線が互いの存在を認めた。

それは新旧のパーティア宮廷魔術師が初めて顔と言葉を会わせた瞬間だった。

- - - - -

ソロンは帽子を押さえていない方の手を顔の横まで上げて拳を作り、次に人差し指と中指を立て笑った。

「？」

何をしているのか分からないアルムが訝しむ表情をする。相手もついつられる、そんな人のいい笑顔でソロンは二つの指で竜眼を指しながら言った。

「双竜か。それは初めて見るわ。」

両方の目が竜眼の状態を「双竜」という。

パーティアの魔術師の塔に秘蔵される本でしか見ることはない言葉である。

それを今聞くとはい！

アルムの表情が一気に陰しくなり、竜眼の鋭い視線が目の前の人物を睨めつける。

竜の如く鋭い視線を受けてもソロンは笑ったままだ。

「貴様、竜眼を見た事があるのか？」

「俺がパーティアに乞われて宮廷に上がった時、竜眼の王子はまだ幼く、右目のみが竜眼だったからな。」

「それより後にもう一人竜眼を持った王女が生まれている。此方は左目がそれだがな。」

「へえ、で三人目がお前な訳？」

興味津々といった風に指はアルムの竜眼を指したままのソロンに対して、

「アルムだ。」

吐き捨てる様にアルムは自分の名を告げ、告げた相手が何者なのかを確かめようとした。

「ソロンなる人物を時のパーティア宮廷が招聘した理由は・・・」

「そう、竜眼の王子に魔力の制御を身に付けさせる為だ。」

赤子の頃から、王子がむずかる度に花瓶だの窓だのが壊れてしまう。それは年々強くなり最早宮廷魔術師だけでは如何ともし難い状態になってきている。

頼むから何とかして欲しい、と遙か昔に黒森の入り口で当時的大臣と交わした言葉を口にする。

「・・・王家で竜印が初めて目に表れ、後に宰相となった人物を・・・、『塔の王子』を貴様が教育したというのか・・・。」

苦々しい思いで唸るアルム。

確かに「塔の王子」の詳しい経緯は謎のままで、ある程度の年齢になるまでは王子ではあるが、王宮に住まわずに塔から宮廷へと通ったくらいの記述しかないのだ。

歴史上初めて竜眼を持つて生まれた人物が次々に発生する苦難をも  
のともせず、尚且つ努力を怠らずに高位の魔術師となり、そしてパ  
ルティアを支える名宰相となった。

パルティアの宮廷魔術師や文官達が尊敬してやまない「塔の王子」。  
その人物を、この軽そうな、唐突に自分を指差して「双竜」とか言  
い放つ人間が（いや、エインフェリアだが）育てたというのか！  
失礼を通り越して無礼極まりない態度も相まって、アルムの怒りの  
目盛りはうなぎ登りであった。

「歴史が正解だったと告げてるだろ。宮廷と魔術師の奴等は俺が行  
くまで王子を塔から出さなかった。魔力の程度の差こそあれ、同じ  
人間だぜ？」

「あの塔・・・貴様が作ったのではなかったのか・・・。」

「元々は魔術師が詰めていた塔だ。魔術の実験となると、頑丈で他  
に被害の出ない建物があるからな。」

「にしては内装や家財道具一式やらが豪華だったぞ。」

そういえば一階には中庭もあった事をアルムは思い出した。

ソロンは指を竜眼から外し、二本の指で空を指す。

「当たり前だ、魔力の制御が出来ないとはいえ、王子だぞ？それな  
りの環境は当然だろ。」

まず塔の王子の精神と身体の健全な状態が最優先されなければなら  
ない。

その為には住んでいる環境も重要だ。王子に相応しい整いをしなく  
ては、宮廷に上がった時に要らぬ恥をかく事となる。

小さな事を見落とすと、塔に閉じ込められた当事者は少しずつ卑屈  
になっていく。

それは積もりに積もって大事に至る可能性を含んでいる、という事  
に気付かない間抜けな輩。

脳裏に浮かんだその間抜けな輩をせせら笑いながら、ソロンは言っ  
た。

「俺は、閉じ込めて出す気の無かった大臣や魔術師とは正反対の事

をしたからな。」

「・・・あの無茶苦茶な日課や修行は、全部貴様から来ていたのか・・・!!」

「へっへー」

笑いながら出た言葉に、アルムの怒りは別方向からベクトルがかかり、そして目盛りがついに振り切れた。

「ハッ、不死者に育てられた平民如きを、パルティア王家が宮廷に迎えるとはな！」

伝説の域を出ないソロンの生い立ちと成り立ちを、忌々しそうに口にするアルム。

それを合図にアルムの心の奥底の感情が決壊して溢れ出す。

王家の血筋たる自分が望んでも決して与えられなかった国民の支持「双竜現われる時、国難に留意せよ」との歴代の王のみに口伝で伝えられた言葉。

全てを憎んでも、憎み足りない。破壊したい衝動に駆られた、あの頃。

去来する感情が、押さえ込んだ思いがのたうち回る竜の様にアルムの身体を支配していった。

- - - - -

どの位の時が流れたのか。

アルムは背中から自分達を呼ぶ声に我に返り、再び感情を押さえ込もうとフードを目深に被った。

そして踵を返そうとしたその瞬間。

「確かに俺は不死者に育てられた。」

「！」

息を呑むアルムの竜眼が捉える賢者ソロンの表情は真剣そのもので、とても嘘を言っている顔ではない。

片手で帽子を尚も深く押さえ、顔半分は切れ込みの入ったつばが隠

す。

鋭利な切れ込みから垣間見えるソロンの眼差しは、焦香こがれいっの色をした眼は鋭い視線をアルムに向けていた。

ソロンのもう一方の手は胸を押さえてる。

「だが、人間の俺を捨てたのも人間なんだぜ。」

言い終わると同時にソロンは歩き始める。

さっさとアルムの横を通りぬけ、先で待つ戦乙女達へと進んでいった。

振り返ったアルムが見たのは、パルティアの旧き魔術師ソロンの背中とその先で待つエインフェリア達と戦乙女。

「歴史と同じく、偉大なる先達は常に先を歩く。」

言い終わると足を動かして同じ方向へと歩き出すのは、パルティアの新しい魔術師アルム。

時の流れもまた然り、と返したのは遙か先で微笑む運命の女神の唇であった。

## ソロンの秘文書

——この書を開く者、決して一人で開くなかれ——  
ソロンの秘文書より序文を抜粋す。

- - - - -

魔術師の塔の最上階にある部屋は、パルティア王家が隠匿する書物を封じている部屋である。

入室を許されているのは魔術師の塔の長と書庫長の二人のみで、後はこの二人が許可した人物が長と一緒にという形で入る事が出来る。その部屋は扉は常に鍵がかかっており、封印の魔法もかけてある。要は二重の封印がかけてあるのだ。最上階への階段も、普段は壁に隠されていて呼び出しの魔法でのみ現われるという徹底ぶりである。だがそれも仕方のない事であろう。何せパルティア建国以来、特に重要とされている魔術書が秘されているのだから。

そんな塔の最上階も年に一度だけ、魔術師達に解放される日がある。「本の虫干し」の日がそれで、普段は開くことの無い窓を開けて光と風を部屋と本に通す。

魔術師達は全員総出で本を広げ、棚の上の埃や床の塵を拭き取る。そして書庫長の指示の下に本の簡単な修復をしたり、足りなくなつた棚を増やしたりといった作業をする。

普段は見ることも叶わない魔術書等を目の当たりに出来るこの日は、魔術師達の密かな楽しみでもあった。

古の賢者の手記、偉大なる魔術師の覚書、魔道具職人達の備忘録など一節を読むだけでも彼等にとっては貴重な体験なのだ。

その年の「本の虫干し」も例年と変わらずに行われていた。

アルムは書庫長の指示に従い、一番奥の下棚で眠っている本を棚

から取り出していた。

「交代で昼食を摂る。アルム達五人は作業を続けていてくれ。我々が戻ってきたら交代して欲しい。」

「はい。」

「承知しました。」

埃がきらきらと舞う塔の最上階で返事の声が上がる。開いた窓から乾いた風がゆつくりそして静かに入って扉へと抜けていった。

しゃがんだままのアルムの視線は取り出した一冊の本に釘付けであった。

茶色い革の表紙をしたその本には、題名が記されていない。

だが、アルムの竜眼はその何の変哲も無い表紙に細く繊細な魔力の波動が魔方陣を描き、消えるその一瞬を捉えた。

この時を逃したら、一生この本を、秘文書を見ることは叶わない！  
駆け抜けた強い思いが、床に置いたその本の表紙を何の迷いもなく広げさせた。

緋色の文字で書かれた序文を見た瞬間、予感が確信となる。

・・・ソロンの・・・秘文書！！

衝撃のような感動がアルムの背筋を走り、頁をめくる手ももどかしいのだろうか。

しゃがんだままの体勢で緋色の文字を竜眼が全力疾走で追う。

秘文書は読み手を幻影へと誘う。その甘美な誘惑に抗う事の出来る魔術師は皆無だ。

- - - - -

乳白色をした砂が一面に広がり、対を成す青い空も無限の空間を彩る。

砂漠に立つ崩壊寸前の神殿の様に砂の上には枯色の石柱が何本も立ち、その一つ一つに碑文が刻まれている。

あるは柱には螺旋を描くように、またある柱には直線を描くように、といった具合に一本一本それぞれ碑文の刻み方が違うのだ。

碑文は魔方陣を組んであるものもあれば、魔術に対する考察といったものもある。

アルムは感心しながら、手でいとおしそくに碑文を撫でる。そして気付くのだ。

この柱一つ一つもまた魔方陣を構成している一部分であると、石柱や途中までしかない階段、白い砂の流れ方、その砂に積み上げである石それぞれが魔方陣の一部であり、平面的な魔方陣を複数用いて敢えて立体で陣を組んでいる。

この魔法陣の一面を見たら一つの陣を知る事は出来る。が全てを把握するには、多面的な視点でこの遺跡のような幻影を捉えなくてはならない。

推察しながらアルムはこの秘文書を記した賢者に畏怖の念を抱く。と同時に全てを解き明かしたい渴望に囚われる。

夢中で石柱と碑文を追うアルムがそこにいた。

- - - - -

．．．．ム．．．．ア．．．．ル．．．．

遠くからアルムを呼ぶ声があるが、呼ばれている本人といえば

「煩い！俺は今返事をしている暇なんか無いんだ！！」とこちる。

アル．．．．ム．．．．！

呼ぶ声と同時にゆさゆさとアルム身体が揺れ、読んでいた石柱に肩がぶつかる。

「アルム！！」

叫ぶ声にアルムの意識は秘文書から現実へと戻って来た。

顔を上げれば、シフェルが心配そうにアルムを覗いている。

「・・・兄・・・上・・・」

戻って来たばかりの意識ははつきりとせず、自分呼び戻した人物をアルムはぼんやり見ていた。

「大丈夫か？」

「は・・・い・・・」

「父上がお呼びだ。アルム、体調が良くないなら、そう申し上げるが・・・」

「大丈夫です。」

「本当に？お前床に倒れてたぞ。」

「・・・大丈夫です・・・」

怒ったように返事をしながら睨む弟を見て兄は笑った。

「では、行こうか。」

差し出した兄の手を一時躊躇った後に取る弟がそこにいた。

嬉しそうに笑うシフェルは、珍しい事もあるものだと思いながら弟を立ち上がらせる。

アルムは床に置いたままのソロンの秘文書を見た。

本は閉じられて茶色い表紙からは魔力の波動は全く感じない。

拾い上げて頁を開こうとしたが、本はびくともしなかった。

「兄上、少し待ってもらえますか？」

「入り口に居るからな。」

笑いながら去るシフェルの背中を見送ると、アルムはソロンの秘文書を元の場所へと仕舞い込んだ。

緋色で書かれた序文を思い出しながら、あの碑文を思い描く。

「確かに、呼び戻す者がいなければ一生あそこに囚われたままだな。」

だが、魔術師であればそれでも構わないと誰でも思うだろう。それ程までに秘文書の中は、あの幻影は甘美な誘惑だ。

幻影から現実へと引き上げてくれた、暖かい手の感触を確かめるように自分の手をじっと見ていたが、暫くのちに両手を持ち上げてフードを目深に被る。

入り口へと向かいながらアルムは呟いた。

「さっきのアレはお礼ですよ、兄上。」

貴方が呼んでくれたから、俺は戻ってこれた。

二人の王子が後にした魔術師の塔の最上階は、小さな埃が飽きもせず  
風に一緒に舞い続けている。

ソロンの秘文書はそんな場所で沈黙を守り、そして永き眠りへと横たわる。

## クールダンセル宅急便 再び

「注文はなんだったのだ？」

ミトラの問いに

「手紙を届けてほしいってさ。」

ザンデが答え

「ああ、俺が行くよ。場所は？」

フアーラントは爽やかに笑いながら、ママチャリで出て行った。

「注文はなんだった？」

ザンデの問いに

「ピザを一つづつ、全種類だそうさ。」

ミトラが答え

「全部う？何処のアホだ！！」

怒髪天を衝く、といった表情のエルドは宅配バイクで配達に出かけた。

「注文はなんだったのだ？」

ミトラの問いに

「タチの悪い連中をシメて欲しいってさ。」

ザンデが答え

「手加減は要らねえな。」

ニヤリと晒いながらでかいバイクにまたがったアドニスの姿は小さくなっていた。

「注文はなんだった？」

ザンデの問いに

「砂利を運んで欲しいらしい。」

ミトラが答え

「行ってくる。」

キーを人差し指でくるくると回しながら、セレスはダンプに乗り込んだ。

「注文はなんだったのだ？」

ミトラの問いに

「イノシシの罨。急ぎだつて。」

ザンデが答え

「アタシが送るわ。」「じゃあ俺も。」

ファイルスが乗る真つ赤なスポーツカーの助手席に乗り込もうとしたゼノン。

「ファルクス乗せて行ってくる。」

そんな彼を振り落としてファイルスはさっさと出発した。

「ロゼッタのは間抜けだなあ。」

笑うソロンが乗る軽トラの荷台から声がする。

「おい！この扱いは何だ！！」

アルムが腰を上げながら抗議した。

「害虫が大量発生したから、野焼だつてよ。」

「だから！俺の質も」

「行つくぜええー！！！！」

「おごっ」

ソロンの急発進により、アルムは荷台でスッ転んだ。

「今日もミッドガルドは平和だなー。」

空に向かって伸びをしながらザンデは言った。

「それは何よりだ。」

帽子を取り、同じく空を仰ぐミトラが返事をする。

-  
-  
-  
-  
-  
-  
-

今、ミッドガルドは御中元シーズン真っ盛り。  
三角帽子のロゴマークは、数多のライバルを蹴散らし今日も行く。

## 釣る者と釣られる人

「エインフェリアになるか？」

蒼穹の鎧を纏う神族に問われた一つの魂。その魂が意思表示をする。

「遠慮させていただきます。」

即答であった。

問うた戦乙女の唇が笑いの形を作り、微笑みながら声を出した。

「それは残念。フィレスの願いが叶ったかもしれないかったのにな。」

エインフェリアにならなければその人物には逢えないから、仕方ないか。そう続く戦乙女言葉に引っかけりを覚えた小さな光。

フィレスの魂はめまぐるしく思考を回転させた。

逢いたいひと？――

シフェルとは別れを済ませたばかりだから、彼が死んでいるはずが無い。

そのシフェルと自分の血を分けた一人娘クリステイはとうの昔にパルディアを出奔して、随分と時間が経っている。

自分の意思でこの国を後にした娘に逢いたいといえばそうだが、その娘もうとつくに自分の人生をすっかり歩んでいる筈だし、おそらく行動を共にしていた二人もそうだろう。

今更だわね――

自嘲気味に呟いた言葉は音にはならず、想いとして零れた。

そして魂が思い浮かべたのは自分と同じ血が流れている兄と姉であった。

――

兄さんに会ったのは、何年前だったかしら？

パルティアに嫁いで随分と年月が経ってから、ディパンを訪ねた。パルティア王妃として最初で最後、一度きりの里帰りだったわ。

王妃が国外に出る訳だから訪ねるのは一国のみではないし、当然手ぶらはありません。

外交目的は複数あったけど、個人的な目的もあった。それは姉さんが匿われていた場所を兄さんに教えてもらって事だった。

その場所が記された地図を広げ苦笑するアレス兄さんが言った一言。

「もう時効だから、いいか。」

そして兄さんは姉さんの眠る場所以外の事も、色々教えてくれたっけ。

「セレスが何でお前の片腕落としたか、ちゃんと解ってるのか？」

アレス兄さんは私の無い腕から顔へと視線を移動させながら言った。

「姉さんは『射なさい』って言ったから、そのつもりで矢を番えたの。」

「自分の命を手土産にしてディパンに戻っていうセレスの思いに、気付いたか。」

「矢を放つ直前に気付いた。だからセレス姉さんの願いを私は叶えられなかった。」

気付かずにいたなら、姉さんの命を手土産にディパンへ帰還した。

それでセレス姉さんの願いは叶う。けれど起きた現実は違ってしまっただ。

私は小さく唇を噛んだ。そして思い起こすあの言葉。

「姉さん・・・、すごく怒った顔で『自分の居場所に戻れ』って・・・。」

「叱られちゃった・・・。」

「当たり前だ。セレスにしてみれば、腕一本で戦場からフィレスが離れるものなら迷わずにそうするぞ。」

戦場は命のやり取りをする場所だからな。兄さんの言葉を聞きながら私は俯いて茶器を見た。

姉さんは実際そうしたしね、と言ってから残ったお茶を口に含む。

「守る立場になって、気付いた事、気付かされた事が沢山あるもの。」

顔を上げて兄さんの色素の薄い灰青の瞳を見ながら私は言葉を続け

た。

兄さんの瞳が優しく細まっていく。

「フィレスがそれに思い至る様になったか。俺達も年を取る訳だ。」

― 兄妹で約一名、年を取ってないのがいるがな―

続いた兄さんの言葉に二人で笑って、それから沢山話をして。

アレス兄さんはディパンの国王として今もその地位に在る。

だから、逢いたい人はあと一人だけ。

まさか――

まさか――

まさか――

・・・姉さ・・・ん・・・なの・・・？――

私は時が止まったかと思った。

――

フィレスは存在としての神族は知っていたが、実際に相對するのはこれが初めてであつた。

その神族が事も無げに声を出す。

「斬鉄姫セレスは確かにエインフェリアとして召喚した。」

・・・う・・・・・・そ・・・――

「私は嘘は言わない。」

緑の瞳が強く光った。そしてシルメリアは両手を自分の両膝に当て、身体を折って視線を下げる。

その強い双眸と同じ高さの一つの魂があつた。

密度の濃い金の髪はうねりながら蒼穹の肩を包み込んでいる。

フィレスと対峙している存在。それは彼女にとっては決して容認することのできない神族だ。が、目の前の戦乙女 of 存在感和それを取巻く眩しいまでのオーラはいかばかりであろうか。

油断したら呑み込まれる――

そんなフィレスの感情を察したかの様に戦乙女は微笑んだ。

「エインフェリアになったら、フィレスの願いが叶う。」

なにを、一体――

「姉に逢い、その背中を守る事が出来る。」

それはあまりにも短い、だが決定的な一言だった。

小さな光となつた魂が震える。

剣を持ち軍籍に身を置いた姉と違い、妹は弓を持ったのみだった。

軍に属さないという事は戦とは無関係であり、二人が共に戦う事は決してないという事実を意味する。

弓を手にしてから生まれた願い。しかしいくら腕を磨いても、ずっと自分を守ってくれた姉の背中を守りたいと思ってもそれは叶わぬ願いでもあった。

だがエインフェリアとなればそれが叶うというのは、フィレスにとって随分と魅力的である。がしかし、天界にしてみれば敵対行為としかならない生前の自分の行動。

様々な思いを巡らせながらフィレスは考え込んでいた。

そんな中で戦乙女が言つた言葉は。

「だから、私に釣られてくれないか？」

小さな笑いが含まれたその声を聞きながらフィレスは無意識に返事をしていた。

よろしいのですか？――

心中はともかく、目上の存在に対して徹底的に礼儀を守るその返事は、骨の髄まで王族としての教育を叩き込まれたと思わせるものであった。

「私はシルメリアだ。」

シルメリア様、私は――

改めて名乗ろうとしたフィレスと全く同じ言葉を嘗て対峙した魂から聞いた事があったシルメリアは、その時と同じ返事をする。

「シルメリアでいい。」

・・・・・・――

沈黙するのも同じだ、とシルメリアは思った。

「言いにくいのであれば、フィレス『戦乙女』と。」

承知しました――

随分と印象は違うものの、やはり姉妹だ。良く似ている。

姿勢を正しながらシルメリアがそんな言葉を口にするるとフィレスの嬉しさを隠さない想いが零れ落ちる。

ありがとうございます――

零れた想いは四方八方に霧散して消えていく。それは人間の一生にも似た儚さであり、そして強さでもあるのだろう。

「しかし、そのままでは片腕だ。・・・年齢を遡るか。」

シルメリアの呟きに反応したフィレスが怒涛の勢いでなにやら伝えてくる。

苦笑しながら「是」と答えるシルメリアは、やはり人間という存在の強かさを思わずにはいられなかった。

「フィレス、私と共に在れ。」

ミッドガルドやパーティアあるいはディパンを守る為に召喚されるのであれば、絶対にそれを受けなかった。それはヴァルハラ、神族の、大義名分。

そして何より大義名分の為に生きた私の人生はもう終わったのだから。

でも、戦乙女は私の個人的な願いを餌に「釣られてくれるか？」と言ってきた。

私の王族としての矜持を傷つける事無く、個人的な願望も満たされる。何より姉さんをエインフェリアとして召喚している。

優しげな外見とは裏腹に大した手腕だわね。ま、実際私も釣られた訳だし。

遠のく意識の中でフィレスはそんな事をつらつらと思っていた。

零れ落ちた強さと儂さの中で、召喚の言葉と共に舞い上がる金色の髪と蒼穹が一つの魂を包み込んだ。

- - - - -

戦闘が終わり、若草色の衣を身に付けた弓闘士が見る光景はバラバラの肉片となり地面に転がっている魔物。

その手前に居る剣を構えた戦士の背中は鎧で覆われており、赤錆色の髪の毛と同じ色の兜飾りが血の様にその上に流れていた。

守られるだけでなく守りたかったと、ずっと追いかけていた背中をじっと見つめるフィレス。

万感の思いを胸の秘め、今この時、振り返った姉に妹は手を振りながら満面の笑顔で声を掛ける。

「やつほー、姉さん！」

「恨み言の一つもないの？相変わらずね。」

「そりゃあ多少は不便だったけど、今有るし、おかげで若い姿で復活できたしねー。」

さざめく様に笑いながらその姉妹は自分達二人を召喚した戦乙女の方へと並んで歩いて行く。

二人の先に屹立する戦乙女は光の中で微笑んでいた。

## 目標を包囲せよ

ぱちり、ぱちりと乾いた音が一室に響く。

フィレスとエルドが小さなテーブルを挟んで互いに向き合い椅子に座っている。

二人の間のテーブルには遊戯板が置かれており、人の手がその上の駒を動かす。

交互に駒を動かす音のみがこの部屋に存在する音であり、時に早まり時に遅くなるその音は勝負と同じで全く先が読めなかった。

- - - - -

駒を動かす音がしなくなったのは、いくつかの手を交わした後であったろうか。

「アタシの勝ちね。」

「・・・・・・・・・・」

フィレスの勝利宣言にエルドは返答しなかった。

「勝ったんだから、アンタの問いに答える必要は無いわよ。」

疑問形ではなく言い切ったフィレスは空色の瞳をテーブルからエルドへと移した。

「だから、この部屋から出て行つてよ。」

フィレスの声はいつもより少し低い。真剣な場面になると彼女の声がそうなる事を知っているのは、限られた者達だけだ。

「ケツ、偉そうに言いやがって。」

刺々しい返事をするエルドもまたテーブルから視線を上げ、腕を組みながら、椅子の背に伸びをするようにもたれかかった。

「大した事じゃねえだろう。だから教えるよ、お姫様。」

お姫様と呼ばれた人物は、確かに見た目はそう呼ばれても差し支えない。が、中身は外見と一致してはおらず、それを承知の上での台

詞だ。

エルドは相手に対して侮蔑の色を隠しもせずに口を歪め、そして嗤った。

嗤われた当人といえば、静かな表情のまま空色の双眸を僅かに細めただけだ。

沈黙と時が流れる中で二人は、良く言えば睨み合い、悪く言えば見つめ合っていた。

フィレスが椅子を引き立ち上がりながらエルドに言う。

「アンタが出て行かないなら、アタシが出て行くわよ。」

言い終わると、壁とテーブルの間を扉へと向かって通り抜けようとした。

椅子とテーブルが倒れる音が響き、ばらばらと乾いた音と共に遊戯板の駒が床一面に散らばる。

「待てよ！」エルドの声は自身の靴音を消した。

フィレスは突然の大きな音と自分に迫ってくる相手に驚き、思わず壁へと後ずさった。

エルドは乱暴にフィレスの顔の横へと両手を付き、口端を上げたままゆっくりと肘を曲げる。

それは畏にかかった獲物を確認するかの様だ。

「そんなに言いたくねえのかよ。」

嗤いながら出た声は侮蔑の色を含んだまま空間へ浸透していく。

二人の距離もじわじわと縮んでゆき、互いの鼻先が触れそうになる。

「勝負に勝ったんだから、当然じゃない。」

フィレスの言葉の後は互いの呼吸音が聞こえるのみとなった。

二人は視線を逸らす事無く、床に散らばった駒の様に時も止まる。

フィレスは完全にエルドに包囲された。

目標を包囲せよ（後書き）

テーマ「ドキがムネムネする話」  
結論「自爆にて木っ端微塵となる。」

## 包囲戦線異状なし

フィレスの空色の視線は引き絞った後に放った矢の様にエルドの瞳に突き刺さる。

エルドもまた鋭利な矢を的確に空色の瞳に射返す。

二人の身体に横たわるのは僅かな空間しかない。そしてふたつの呼吸音が蔦の様に二人に纏わり付き、雁字搦めに締め上げてゆく。

視線を外さないままの、そんな状態でどのくらいの時が過ぎたのであろうか。

沈黙を破ったのはフィレスであった。

「アンタにとって意味は無いじゃないの。知りたがる理由は何なのよ。」

「理由？どうだっていいだろ。」

「他人を蹴る口実が欲しいからじゃないの。」

「へえー、解ってんなら言」

「言わないわよ、アンタになんかに……！」

互いの体温と呼吸を肌で感じる距離でありながら、交わす言葉は棘棘しい。

フィレスの背中と両手の手の平に壁独特の冷たい感触が張り付く。

壁以外の残る三方をエルドの両手と身体で包囲され、退路を塞がれた状況にも関わらずに引かない「姫君」がそこにいた。

そんなフィレスを見るエルドの視線が段々と鋭さを増してくる。そして視線と同じく言葉も鋭くなっていった。

「権力者って輩はみんなそうだ。上から目線で偉そうに命令しやがつてよ！」

吐き出した台詞は空間を支配した後、床に散らばる駒に積もる。

心の底から相手を忌々しく思うエルドの感情は、遠慮なくその態度に出していた。

「……だったら……何なの……」

フィレスは搾り出した自分の声を、どこか他人の声の様に聞いていた。  
身体の下からふつつつとちいさな怒りが湧き上がり、じわじわと広がる。

それを押さえようと硬く唇を閉ざした。

「使い捨てられる立場の人間の気持ちだが、汚ねえ王族どもに解るか  
！！」

エルドはそんなフィレスの事などお構いなしで、己の感情を至近距離の相手めがけて叩きつける。

言いながらエルドは右手で拳を作り、その拳で壁を激しく打ちつけた。

——ダンッ

自分の耳元で大きく響く音にフィレスの身体はびくんと動き小さく強張る。

驚いた顔は一瞬で、すぐに挑む表情になり相変わらず目の前の男を睨み続けていた。

フィレスはこみ上げて来る怒りと共に小さく唇を開いた。

「……から……よ……」

「はあ？聞こえねえよ。お姫様は声もマトモに出せねえのか。」

歪んだ口許で嗤いながらエルドは言う。

「……姉さんが……弓しか許してくれなかったからよ……」  
睨みながら唸りながら言ったフィレスの手は壁から移動して若草色の上衣を両手で握り締めていた。

それを視界の端に留めたエルドはニヤリと笑った。

今の低い声の言葉が、目の前の女にとって嘘ではないという事と大切な意味があったのだと確信しながら。

二人が賭けたのは「何故、フィレスは弓を手にしたのか」であった。フィレスが負ければそれを答える。

フィレスが勝てば何もない。

この賭けは随分とフィレスが損をしている感がある。

普通ならフィレスが勝てば「何故、エルドは弓を手にしたのか」が交換条件となるのであろうが、

あいにく彼女はエルドが弓を取った理由などどうでもよかったし、今まで遊戯板の勝負で負ける事が滅多になかった。

だからこの条件で勝負を受けたのだ。

「そんな事も自分で決められないとはね。くだらねえ理由だな。」

言いながらエルドの右手が壁から離れてフィレスの顎を捉える。

「アンタに・・・何が・・・解るのよ・・・」

「解りたくもねえぜ。腐り切った権力者の事なんてよ。」

エルドは蔑む表情で吐き捨てる様に言った。

フィレスの視界から離れないその表情は、その昔にディパンとパルティアという二つの宮廷で見た、或いは向けられた幾つもの顔と重なる。

二人の間の僅かな空間を、目の前の獲物を蔑むエルドの身体がじりじりと侵食していった。

——からん

離れた場所の駒が叫ぶようにたてた小さな音を二人は聞いた。

今宵の全ては二人のために — 新月の黒森にて —

とくん とくん とくん

心臓が脈打つ音、血潮の歌、命の鼓動が聞こえる。

とくん とくん とくん

暖かな体温と柔らかな湿り気を帯びた肌が私の首筋に触れる。

「・・・あなたは卑怯だ・・・ウォルス・・・」

私の愛しい者が搾り出したその言葉は、床へ落ちてじんわり滲んだ。

そう、私は強欲で我儘で卑怯な存在だ。

「何故、抱かせてくれないんだ！」

小さな叫びと同時に私の身体に巻きついたソロンの腕が、一層強く私の身体を縛める。

私は小さな息をひとつ吐き出す。

手を持ち上げてソロンの顔をはさみ、そして彼の顔を見た。

今にも泣きそうなその顔は、拾って手元に置いたときからおんなじだ。

ああ、お前は何も変わってはいない。

だから、私も変わってはいけない。

「私は手放したくないのだ、ソロン。」

「・・・どういう意味だよ・・・」

「お前と寝てしまえば、ただの『男と女』になってしまふ。それだけの関係だ。」

愛しい存在は息を潜めて私を見る。なんと綺麗な瞳であることが。

ちくり

胸が痛むなど、遠い昔に忘れたきりだ。

甘くて残酷な子供の様に、忘れた痛みをお前は呼び覚ます。

「だが、私は卑怯者だからな。お前とは『親と子』であり『師匠と弟子』であり『男と女』、この全てを手に入れたままでいたいのだ。」

言い終えると、自然に笑みが零れた。

今お前に触れているこの両手は、私を抱いているお前の手と違い体温が無い。

ソロンよ、お前に冷たい私の身体を抱かせたくはない。

明日、お前は私を呪縛から放った後、旅立たねばならないのだぞ。

小さな世界に拘っていても、伸びるものも伸びなくなる。

お前は賢者の資質を持って生まれ、その資質故に親に捨てられた。

気まぐれで拾った子供が宮廷魔術師となり、そして賢者となる。

私の目に狂いは無かった。

だが、お前が私に懸想するとは予想外だった。

そのお前が私を見たまま泣きながら笑う。

ちくり　ちくり

呼び覚まされた感情を心が勝手に反芻する。

「……ウォルスは……マジ……ズルイわ……」

透明な滴が、お前の頬を離れて私の頬に落ちる。

ズルイのはそっちだ、ソロン。

私の決意が鈍る。

「……口付けくらい、いいだろう？」

言い終わると同時に私の腰を更に引き寄せ口を塞いだ。

人の返事を聞かずにさっさと行動する所は一体誰に似たんだ？

ちくり　ちくり　ちくり

思考と胸の痛みを甘い感情が塗りつぶした。

- - - - -

新月の夜、黒い森に守られた小さな家で二つの想いが重なった。

家を守るようにヤモリが扉に張り付いている。

光もそして闇さえも、その扉を開ける事は叶わない。

魔物の気配も、魔獣の遠吠えも、断末魔の呻き声も。

水の匂いも、風の感触も、土の囁きも。

今宵の全ては二人のために。

夜と森は何も言わず、腕を伸ばして全てを包む。

今宵の全では二人のために――新月の黒森にて――（後書き）

テーマは切ない話をケータイ小説風に。  
結果はまたもや木っ端微塵です。

今宵の全ては一人のために――帳の中のヴィルノア――（前書き）

時間的には「千紫万紅二十二・赤銅色」の夜の部分になります。

今宵の全ては二人のために

―帳の中のヴィルノア―

とくん とくん とくん

心臓が脈打つ音、血潮の歌、命の鼓動が聞こえる。

とくん とくん とくん

暖かな体温と柔らかな湿り気を帯びた肌が俺の腕に触れている。

「よく寝てんなあ、オイ。」

俺の言葉に返事は無く、赤錆色の後頭部はぴくりとも動かない。

昨夜からコイツの声が囁れるまで啼かせて身体も散々に泣かせたから、こうなって当然か。

「俺のものだ、てめえは。」

くつくつく・・・笑いながら腕枕をしていない方の腕を動かす。

無防備に眠る相手の顔にかかった髪を、後ろから腰から離れた手で静かにかき上げる。

俺が嘗て生きた世界。解放されてからはこの色をした世界には二度とお目にかかれない、そう思っていた。

だがゾルデでオマエに会った。あの時代の色をした髪、まるであの世界が戻って来たかの様だった。

腐りきって濁った眼をした緑青。

なのに髪は血と血の匂いを撒き散らす。

「平和な世界に戸惑ったのは、てめえだけじゃねえよ。」

俺は血の色をした髪のひとつ房を持ち上げて、自分の目の前で弄ぶ。

「……う……ん……」

自分をかまう気配に気付いたのか、返事をする様に腕の中でオマエが寝返りをうち、顔と髪が俺の腕を滑る。

さらに

争いや対立、金品を襲う輩とそれを防ぎたい連中。血の匂う場所は  
この世界のどこにでも有る。

その匂いを嗅ぎ付け嗅ぎ分け、最終的に「護衛」という仕事を俺の  
生きる場所にした。

「確かに護衛は生死を賭ける仕事だ。油断したらこっちが殺られる  
し、守るべき対象を無事に目的地まで送り届けなけりゃ無能の烙印  
押されて干されるだけだ。」

寝顔を眺めながら白い頬を手の甲で滑らせつつ、俺は言った。

護衛というのは「似た世界」であって俺が生きた「あの世界」では  
無い。

だからゾルデであの色を見た時は、あの髪のをしたてめえを見た時は正直驚いた。

もう存在する事は無いと思っていた血の色。二度と見る事は叶わないと思っていた血の匂い。

なのに当の本人は生かされているといった風で、とても自らの意思で生きているとは思えなかった。

はらわたが煮えくり返る。俺が生きた世界を否定しくさりやがった。だったら捨てたがっていた剣を持たせて、もう一度勝負するればいい。

俺に「二度」は無い。昔取った不覚と一緒に、腐った首も刎ねてしまえば終わりだ。

切欠はどうであれ、俺はオマエが欲しいと思った。

欲しいから確実に手に入れる。だから時間をかけて落とした。

さらり　さらり

俺と同じ洗髪料の匂いがする髪の触り心地は、極上だ。自然と口角が吊り上る。

「俺無しじゃ生きていけない様にしてやろうか、セレス。」

俺は俺が生きる世界を手に入れた。

だからあの時代やエインフェリアだった時なんざ、どうでもいい。

「肉食獣が餌を生かしたまま嬲る気持ちだ、よくわかる。」

反応が無いのはつまんねえ。その上こっちまで眠くなる。

セレスは腕枕に頭を預けたまま沈黙と眠りの海に沈んでいる。

俺は髪を弄んでいた手を白い背中へと滑らす。

さらり　さらり　さらり

髪と肌の感触を楽しみながら、赤錆色の頭に顔と意識を沈めた。

- - - - -

嵐の夜、ヴィルノアの民家の一室で二つの想いが抱き合う。

外の喧騒が微かに聞こえるその部屋を支配する静かな呼吸音が二つ。

黒い豹は愛しい相手を自分の領域に引き込んだ。

星も、月も、雲も、空の全ての色は黒となる。

雨の匂いも、嵐の感触も、石畳の囁きも。

今宵の全ては二人のために。

喧騒と沈黙が交互に支配するヴィルノアの街を、運命という帳が覆う。

今宵の全ては二人のために――帳の中のヴィルノア――（後書き）

テーマ〓ほんのりセクシな話をケータイ小説風に。  
結果〓もちろん木っ端微塵です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0958p/>

---

細石～さざれいし～

2011年11月13日02時30分発行